
とある世界の裏側の伝奇活劇

ぬこまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の裏側の伝奇活劇

【Nコード】

N1252F

【作者名】

ぬこまる

【あらすじ】

世界の裏側には知られざる戦いの歴史がある。人の業によって歪められた自然の具現である《瘧神》と、その歪みを正すために現れた《神人》の闘争の歴史。東北地方桐生市郊外の鞍形山に封じられた巨大な鬼を監視する《鬼討師》の一族 桐生家の二代目を継いだ英国帰りのはっちゃけ少女「桐生マナカ」は、相棒である《式神》の少女「桐生マギカ」とともに、世界の裏側で際限なく繰り返される戦いに身を投じる事となる。……彼女たちが挑むもの、これ、すなわち人間の業そのものである。

とある世界の裏側の日常風景（前書き）

この作品は、現在、Arcadia (<http://mainnet.ath.cx/>) というサイトにも投稿している一次創作で、多重投稿になります。

内容は現代日本の東北地方を舞台に、能天気な『魔法使い系』の女主人公が、生真面目な『戦士系』の少女（少なくとも見た目は）と、三枚目の『遊び人系』の男の子（言うにはちつとばかし年を食っています）とともに、様々な怪奇現象に立ち向かうお気楽アクシヨンコメディです。

剣と魔法と、鬼と妖怪と、神と悪魔と、英雄と怪物の取り留めない話になりますが、お気に召しましたら幸いです。

とある世界の裏側の日常風景

「本日は、英国航空スカイライン287型機をご利用頂きまことに有り難うございます。当機はヒースロー国際空港発、成田国際空港直行便」

……懐かしいユメを見ている。

これは、今から三年前の話。

「マナカは寝てしまったか。無理もない、出立間際のごたごたが堪えたのだろうな」

ふむ、と美髯を蓄えた紳士風の父が、わたしの頭をぬいぐるみのように撫でる。

大好きな父親の手。

それはいつも「よくやったなマナカ」と、わたしを優しく包み込んでくれる手の平だった。

「ごたごたの一言で済ませてもらっては困りますわ。トレイシー先生も、ローランド幼年学部長も、今回の件は寝耳に水でしたのよ」

微睡まどろむわたしの身体にコートをかけてくれたのは母だ。

英国生まれ、倫敦育ちの母親。

とても美人で気立てもよく、怒らせるとちよつとだけ怖ろしい母の手がわたしの頬を撫でる。

「それは詫びるが、今回の件は私も驚いている。倫敦のお偉方に話を通すのが遅れたのは純粋な手落ちだ。勘弁してくれ」

「私も驚いていますわ。……英国人の私がこの子を身籠ったと言うだけで貴方を追放したあの家が、今になって混血と忌み嫌うこの子を後継ぎに指名するなんて」

日本人の父親と、英国人の母親。

祖国の家はわたしが『あいのこ』だと言っただけで両親を追い出したのだ。

……その結果。

わたしは母の故郷で成長して。

「ふふ。それだけこの子が優秀だという事だろう。人手不足に悩むあの家が何としても呼び戻したいと思うのは、むしろ当然の事だ」

「……確かにこの子の才能は神がかっています。けどそれだけの理由で、古びた因習に固執するあの家が余所者の私まで呼び戻すかしら?」

何かわたしの評判を耳にした祖国の親戚が、自分たちのした事も忘れ、手の平を返して両親を呼び戻したとか。

その変節ぶりは、当時13歳の子供だったわたしの目から見てもみっともなく、帰国したあかつきには何か嫌味を言っつてやろうと思っつていたくらいだ。

無論、両親に内緒でだけ。

「君の不満も分かるが、そろそろ許してやってくれないか? あの家は閉鎖的な日本の鬼討組織の中でも特に排他のお家柄でな。……

始祖が未だに存命している事もあって、《神人》まもついでの貴い血は近親婚によってのみ保たれると信じきっているのだ」

「その理屈は解ります。けれど、鞍形山の《瘡神》えやみのかみを討伐する為に私たち英国の魔道士に助けを求めておいて、事が済んだらあれでは誰だつて怒ります」

「何しろ世間知らずな人たちだからね。実際、私がこの国で最初にした事は、彼らの代わりに《連盟》の人たちに頭を下げる事だった。ふふ、君との結婚に反対されては堪らないから私も必死だったよ」

「まあ貴方つたら」

「……でもいいのだ。」

父は祖国の家族を恨んでいないし、母も口ではきついコトを言ってるけど、本音では仲直りしたいって思ってるようだし。

わたしも本気で恨んでいたわけじゃなかったから、帰国したら仲良くやっていこうと思っつていたのだ。

だつて、

「しかし帰国したら大変だぞ？ 何しろマナカの二代目襲名は、御前会議で《王》^{アカシヤ}の了承を取り付ける事が前提の話だ」

「大丈夫よ。あの人たちは兎も角、桐生家初代マレビト^{クリカラ}倶利伽羅はれっきとした現世神。その決定はきつと《王》の了承するところにあるわ」

「……今だからこそ言うが、あの家が私を呼び戻そうとしたのは、これが最初ではないのだ」

「どうせあの女と手を切れ、じゃなくて？」

「その通りだ。だが私はその度にそれだけは出来ないと訴えてきた……その事が家族揃つての帰国に繋がつたと思うと、感無量だ」

「貴方……」

いつもは謹厳実直な両親も、この飛行機に乗り込んでからはこれこの通り。

娘のわたしが狸寝入りを決めたまなきやいけないほどの熱々ぶり。ああもう。いいぞ、もつとやれ。

「私が不甲斐ないばかりにお前たちには苦労させてしまったが、もう大丈夫だ。落ち着いたら故郷の町を案内してやろう。自慢ではないが、杜の都と呼ばれる桐生市は名所には事欠かん。一度や二度で案内しきれるものではないから覚悟しておけ」

「あら素敵、わたし日本の温泉に興味があるの！ バースの温泉は俗っぽいから行った事がなくて。ねえ、温泉って本当に地面からお湯が湧きだしてるの？」

「勿論だとも！ よし、帰国したら真つ先に温泉に行こう。何もかも、マナカと三人で鞍形山の霊湯に浸かって旅の疲れを癒してからの話だ」

「あら、マナカと一緒にダメよ。この子はもう、父親と一緒にのお風呂に入つていい年頃じゃなくつてよ」

「なんだ、私だけ除け者か。それは些かならず寂しいぞ」

そんな会話を耳にしながら微睡む時間。口元がにやけ、胸の中が

穏やかになるのを自覚する。

わたしは 桐生マナカは幸せだった。

何も思い煩う事はない。心優しい父親と、愛情豊かな母親。偏屈物には事欠かない世界の裏側において、もはや何かの奇蹟と言うしかないほど善良な両親の許にあるこの幸福。

それがずっと続いていくんだって、

「っ!?!」

がくん、と身体が投げ出される衝撃に微睡みを中断されたこの瞬間まで、何の疑いもなく信じていたのだ。

「マナカ……!」

上とも下ともつかぬ方向に投げ出されたわたしの身体に手を伸ばして、両目を剥いた父は叫んだ。

「マナカ!? マナカ」

……何が起きたんだろう。

安全な空の旅だったはずだ。英国のヒースローから日本のナリタまでの旅客機での移動。過去にその航路での事故はなく、あってもちよつとしたトラブル程度だって聞かされていた。なのに、これでは言い訳も出来ない墜落事故に……!

「けほっ」

ぐるぐる回る視界の中、背中に何か硬い物がぶつかって息が詰まる。

そして、最期の瞬間 涙に霞んだ両目が捉えたのは、

「有翼魔人!? こいつら米国の」

「貴方、錫杖を……私は」

歴戦の鬼討師である父と、魔道士である母が、それまで知識の中にしか存在しなかった《鬼》の眷属と戦う姿だった。

……風を感じて目を覚ます。

気が付けば視界には、既に崩壊する機体の阿鼻叫喚たる末路はなく。代わりに何も無い、本当に何も無い空虚なソラが目の前にあつた。

何事が起きたのか確認しようと身体を起こして、言葉を失う。

わたしが地面だと思っていた物は、薄い膜状の金属だった。わたしの身体を優しく受け止めるほど柔らかい、金属性の二等辺三角形が風に乗る、雲の上を飛翔していたのである。

言葉を忘れるのも道理というもの。世界の裏側に生きる者たちにとって最高の学府である倫敦の連盟本部にて英才教育を受け、古今東西の魔術、法術、秘蹟に通じたわたしもこんな神秘は知らない……。

「良かった、意識が戻りましたかマナカ？」

その声でようやく気が付いた。

気配なんて感じなかったのに、振り向いたわたしの前には鋼鉄製の人形が直立していた。

いや、これは人形なんかじゃない。

日本の傀儡とも、英国のゴーレムとも、チェコの自動人形とも違う人ならざる人の姿。

……あえて言えば騎士だろうか。

板金の甲冑で全身を包み、それぞれの愛馬に騎乗して自慢の剣を振るい、敵と戦い討ち取る為の騎士。目の前のそれは、歴史や伝説で語られる勇ましい騎士の姿とかけ離れているのに、何故そう思ったのか。

「……思考に若干の混乱が見られますね。ならば何があつたか説明するのはもう少し待ったほうが賢明でしょう」

低く抑えられた声は年若い女の子のものだ。

「それともよもや日本語を解さぬと？」

わたしより一つか二つ年上の女の子が発した流暢な日本語。

「……ううん。日本語は得意、だけど……」

「それは有り難い。私は異国の言語に不慣れですから」

ただ、その姿をなんて言えばいいのか。

ソレは全身に鋼鉄を纏っていた。

東洋の鎧とも、西洋の甲冑とも違う鋼鉄製の防具は、あまりに異質。

色は褐色。鋭角的な形状は全身を隙間なく包み込む滑らかな金属製のスーツをベースに、胸と両肩、両手と両脚の部分を何重にも巻き付けたシャープな板金で補強し、その頭部はすっぽり覆う尖った兜のようなものに包まれて何も見えない。

……まるで刃物で出来た人形のように。

わたしの知る限りこんな生き物はこの星に生息していない。

「……ああ、この姿を警戒しているんですね。すみません、気が付きました」

そう思った瞬間　まるでわたしの思考を読んだようにソレは、

「嘘……」

ソレは意思のある液体金属なのか。瞬く間に溶け出した鋼鉄は足元の鉄板に吸収され、そして、その中から現れたのは……。

「私はマギカ。桐生家初代マレビト俱利伽羅によって創造された《式神》俱利伽羅マギカ。彼の命に従い、彼の後継者である貴女を守護する任に就いた貴女の従僕です」

風に靡く朱い髪と、赤みがかった黒曜石の瞳。艶やかな白磁の肌を包む青い和服。

それは際限なく気高くて、息を飲むほどに美しい　思わず嘘と言いたくなるほど綺麗な女の子だった。

これが父さんの言っていた大和撫子ってヤツかと、見当違いの感想を思い浮かべるわたしの耳に、酷く可憐な少女の声が滑り込む。

「我らが《王》の名においてマレビトの格を認められ、桐生家初代俱利伽羅の後継者と認められた桐生マナカに永遠の忠誠を」

そうしてわたしは理解した。

わたしの頭はこれっぽっちも理解していなかったけど、わたしの血は誰に説明されるまでもなく理解していた。

……そう。

「そしてマナカ、私は貴女に残念な報告をしなければなりません」
人の世に呼び出された自然ならざる災厄を鎮めるマレビトの宗家。
その後継ぎに選ばれたわたしは、

「私が貴女を確保したとき、貴女の両親は」
「この子と一緒にあいつらと戦っていかなきゃいけないんだ、って
事を。」

「……ん」

温かい布団の中から手を伸ばして、むやみやたらに喧しい目覚まし時計を驚掴みにして黙らせる。

……いつも思う。

どうしてわたしはこんな物をセットしたんだろうって。
それぐらいコイツは憎たらしくて仕方ないヤツなのだ。

特にあの音。

じりりじりりって何だーって叫びたい気分。

どうせわたしを起こすなら、もっと優しい声で「起きなさいマナカ」ぐらいは言ってほしい。

「む……」

なんて微睡んでいたら今度は呼び鈴が鳴り出した。

ぴんぽんぴんぽんはつきり言ってるさい。連呼するな。

「こんな朝っぱらから……」

手元の目覚まし時計を確認して居留守を決め込む。
だってまだ七時半だ。

これが平日ならちよっとピンチだけど、今日は休日だからノープロブレム。

黒潮が打ち寄せる太平洋に面した桐生市は北国の割には暖かいが、わたしの家がある愛生町は、十月の終りともなるとそれなりに冷え

る。

特に朝は日本アルプスの登頂に成功した寒気が、極寒の鞍形山くわじりやまを下つてきて大変なことに。

ならお日様が元気になる昼過ぎまで眠るのは、美容と健康が気になる16歳の女の子にとって義務というもの。

そうに決まってる、そうに決めたと布団に潜り込む。

「……」

なのに呼び鈴を押しまくる誰かさんは何を考えているのか。

びんぽんぴんぽんと鳴り響く呼び鈴の間隔はますます短くなり、

厚手の掛け布団を頭までかぶっても近所迷惑な騒音は消えてくれない。

仕方なく掛け布団に包まったまま起き上がる。

「……」

見慣れた六畳間の和室。

私物は少ない。

倫敦で飛行機に積み込んだ思い出の品は、肌身離さず持ち歩いていたこいつを除いて全部燃えてしまった。

父さんが作ってくれた木彫りの彫刻も、母さんが作ってくれたティベアのぬいぐるみも、全部燃えてしまったのだ。

「あんな夢を見るから……」

ぐつと堪える。

まだ泣けない。わたしはまだ一人前になっていない。わたしはまだ両親の仇を討っていない。

「……というか空気読めあいつ」

ごしごしと目元を拭って廊下に出る。

身嗜みを整えるのは後だ。今は乙女の感傷に泥を塗った下手人をとつちめないと。

下手人には心当たりがある……っていうか、あいつしかいない。

びんぽんぴんぽんと煩い事この上ないので、冷え切った廊下を渡って玄関へと急ぐ。

板張りの廊下。漆喰の壁。そして安物のタイルを敷き詰めた玄関が視界に入り、引き戸の鍵を外したわたしは、

「今日は七時まで起きるといふ約束ではなかったのかマナカツ」
……こう。

凄まじい勢いで引き戸を開けた女の子の剣幕に驚いて尻餅をついた。

ぼふっ、とマヌケな音をたてて掛け布団が緩衝材になる。

「……やはりまだ起きたばかりなのだな、貴女は」

はあ、と呆れたような溜め息。

わたしより一つか二つは年下に見える少女。黒い髪、黒い瞳と純和風の容貌。夢の中で見た姿とは違うラフな恰好。白いティーシャツに袖を通して、洗いざらしのジーンズを穿いただけの見てるこっちが寒くなりそうな服装の女の子は、一応、対外的にはわたしの妹で通しているわたしの従僕　人ならざる《式神》である。

名前はマギカ。

桐生マギカは、ほとほと呆れたようにかぶりを振り、蛙のように鎮座するわたしに戻した目を曰くありげに細めた後、

「ではマナカ、まずは弁明から聞かせてもらおう」

なんて、ふざけた台詞を口にしたのであった。

「……」

これには、流石にカチンときた。

被害者が加害者に弁明とはこれ如何に。わたしの貴重な睡眠時間と乙女チックな感傷タイムを台無しにして、ネグリジェの女の子に尻餅までつかせておきながら何様の心算か。

「弁明、ねえ」

ふうん、とすこぶる好戦的な吐息を漏らして身体を起こすと、マギカの表情がますます険しくなる。

そうして至近距離で睨みあうこと数秒の後、先に口火を切ったのは頭を直角にしてわたしを見上げるマギカだった。

「……そうする事が不本意であるように聞こえるが」

開戦理由に一つ追加。わたしを見上げる角度がむかつく。

別にわたしの背が高すぎてこうなっているわけではない。マギカの背が低すぎてこうなっているのだ。

だっていうのに「貴女の目を見て話すのは疲れる」と言わんばかりに見上げてくるとは失礼にも程がある。なによ、自分の背丈が150センチそこそこ低すぎるのが悪いんじゃない。

だっていうのにわたしの所為にするな。わたしは大女じゃないやい。

「だって弁解する筋じゃないしね」

ふふん、と鼻を鳴らして続ける気分はこの上なく好戦的。

「それより何で呼び鈴を鳴らすのよ。本邸の鍵ちゃんと渡したでしよ？」

言外に目上の者に出迎えさせるとは何事かと批判してみる。

「私もそうした方が手っ取り早いと思っただが、所詮は婢女はしために過ぎない私が、当主である貴女の邸宅に無断で上がりこむのは如何なものかと言う向きがあるのでな」

「あーそういうコト……それじゃ当主命令、今日からあんたはこっちで寝泊りしなさい。それで何か言われたら、使用人が離れに引込むのは何かと不便だってわたしに言われたって答えなさい」

「それは断る。私は確かに貴女の従僕だが、その務めにおしめも取れない子供の世話は含まれていない。だと言うのにこれ以上こき使われて堪るか」

……こいつめ。

黙って微笑っていれば死ぬほど可愛いのに、どうしてそんなに可愛げのない態度を取るのか。

「それより私の質問に答えてほしい。貴女は昨夜、寝る前に約束した筈だ。今日は《場》さいだんの調整で疲れているので、残りの準備は明日の朝に終わらせると。

なのにそんなに寝惚けてどうするのだ！ 御前会議は正午からなのだぞっ！…！」

「えっ!？」

「『えっ!？』じゃない! まさかと思ったがやっぱりか!? すっかり忘れていたのだなマナカッ」

はっとなつて口を塞ぐ。

そして、ようやく思い出したこれまでの経緯を四捨五入して考えると、何故か不条理な結論が導き出される。

「もしかして悪いのはわたし?」

否定の言葉を期待して訊いてみる。

「だからそう言っているのだッ」

だが返つてきたのは全面的に肯定する言葉だった。

「私は一睡もせずに必要な手筈を整えていたのに、七時までに起きると約束した貴女はいつまで経つても起きてこない。貴女はいま何時だか分かっているのか? もう八時を過ぎているのだぞ!？」

それを否定する材料はわたしの中に無い。

だって色々思い出した今は、雑事をこの子に押し付けて布団に潜り込み、早めに起きるといふ約束も忘れて二度寝を決め込んだわたしは人としてどうか、って思うし。

勝手に昔の夢を見て感傷的な気分浸っていたのを邪魔されたって理由で、何か気の利いた嫌味でも言つてやろうと思ひ立ち、考え無しに実践してしまつたわたしは相当アレだつたわね、とも思うし。「何を呆けている。何か反論したい事があるなら口にしたらどうだ」……つまり悪いのはわたし。

この子はぜんぜん悪くないので反論なつて以ての外。そう思ひ立つた瞬間、

「ごめんなさいッ」

がばり、とお辞儀して女の子の顔と女の子の顔がごっつんこ。

「……どうして急に謝るのだ」

「……ごめん。ホント、ごめん」

まあ至近距離で睨みあつている状態で背の高いほうがお辞儀をすればそうなるわね……というかもっと早く気付け、わたし。

よろめき鼻の辺りを押さえるマギカと唇の辺りを押さえるわたし。マヌケだと思つ。本当に何をやってんだかと自己嫌悪に駆られる。咄嗟の感情に振り回され、考え無しに行動して失敗する。そんな失敗をうんざりするほど繰り返してきたというのに、何時まで経っても成長しないわたし。

相変わらず理想と現実のギャップが激し過ぎてなんだかへこみそう。

「貴女は本当に困つた人だ……」

その結論はマギカも同じだろうに、

「私はもう怒つていない。だからこの話は止めよう。それと……」

「……それと？」

「挨拶を忘れていた。おはようマナカ。今日も元気な貴女に会えて嬉しい」

彼女はくすりと微笑してそんな台詞を口にする。

……それは反則だろう。

今までの険悪かつマヌケな話の流れから出てくるはずのない笑顔。ひっそりと野に咲く花のように微笑んだ女の子は、わたしの失敗を何もかも許してくれそうで申し訳ない気持ちになる。

「……おはようマギカ。それとごめん。わたし昔の事を思い出してイラついてた」

「だからその話はもう止めにしようと言ってるのです」

ぼそぼそと言いつても口にするかのような心境でうなだれるわたしに対し、毅然と胸を張つた親愛な従者は「さあ」と身体を屈めて掛け布団を拾つてまた微笑む。

「食事にしよう。今朝は時間が無いので簡単な洋食にするが構わないだろうか？」

「ええ」

しみじみと嘆息して敵わないと認める。

やはり四百歳の年齢差は大きい。

「それでは貴女は洗面所で顔を洗つて着替えるように。あまり時間

をかけないように頼むぞ」

人ならざる《式神》の少女、桐生マギカ。
桐生マナカの相棒はこんな女の子だった。

「さて、と」

あまりあの子を失望させられないので頑張ってみる。

洗面所で顔を洗い、自慢の黒髪を梳かしたわたしは自分の部屋に戻り、布団を畳んで掃除機をかけ、今は着替えの真つ最中。

寝ている時はつけない主義なので、身につける下着はブラと一緒に選ぶことになる。

別に勝負下着と言うほどではないが、今日はそれなりに大事な日だ。何かの間違いで見られても女のプライドを保てるお気に入りを出そう。

そして上に着るものは、まあ、あいつらが用意した正装なんて眼中に無いから何を着ても一緒か。ならそっちもお気に入りを出そう。呪術加工を施した青いブラウスと、黒いタイトスカートきかがくもようの組み合わせ。ブラウスの襟元に施された幾何学模様の刺繍と、ブラウスの袖とスカートのベルトに使われている宝石の意味が判らないヤツは流石にいないだろう。

「よし」

自らのチョイスに満足してネグリジエを脱ぐ。

すると何か鎖のようなものが顔にかかり、そして落ちた。

そして、裸になったわたしはある物を付けっぱなしにしていた事に気が付いて、少し慌てた。

「やばっ」

本当に少しだけ。

肌身離さず身につけていたのは理由があつての事だし、形状記憶の魔術で保存されたそれが床に落ちた程度で瑕付く事もない。

まあそうは言ってもこいつの事を忘れていた言い訳にはならないんだ。

「父さん、母さん……」

純銀製のロケット。あの襲撃で両親を失ったわたしにとって、肌身離さず身につけていた思い出の品は自分の命より大事な物だった。

「わたし、頑張ってるよ」

しみじみと呟いて抱きしめる。

「……」

そうして暫し無言の時を過ごしたわたしは、

「何時まで着替えに手間取れば気が済む！ 食事の用意はとっくの昔に終わっているぞ！！」

結局あの子に怒られてしまった。

「すぐ行く。お腹が空いてるんだったら先に食べていいわよ」

大急ぎで下着を替えながら廊下に向かって答える。

「……」

するとこの沈黙。

「ちょっと、何だっこのタイミングで黙り込むのよ」

「……特に理由は。あまり気にしないように」

何でかよく分からないけど、これ以上待たせるのは危険な気がする。

仕方なくスカートを履いたわたしはブラウスに片手を通して急ぐ廊下に出ると漂ってくる芳ばしい匂い。

ブラウスのボタンを閉め忘れたわたしはマジカにもう一度怒られたあと、食欲を誘う朝食の席に着いた。

「いただきます」

と、それぞれの流儀で手を合わせる。

純和風のリビングに鎮座するちゃぶ台の上に並んでいるのは、マ

ギカ曰く簡単な洋食にしては手が込んでいるもの。

焼きたてのトーストと、ハムを添えたサラダをちゃぶ台の中央に。そしてテーブルのこちら側にはスクランブルエッグと淹れ立ての紅茶。向こう側には片面焼きの目玉焼きと、何故か玄米茶。

「ある意味凄いわね、それ」

「？」

これを和洋折半と言っていいものか。

「ずず、と玄米茶を啜るティーンシャツジーンズの和風少女を眺めつつ、トーストを失敬して、苺のジャムをたっぷり塗りたいわ。」

「時間が無い。無作法ですが食事をしながら今後の話をしたいのですが」

「構わないけど、口の中に食べ物がある時は喋らないでね」

「言ってトーストを齧る。」

「マナカは私を何だと……いえ、失言でした」

「そりゃあ、ね。」

「でもだいぶわたしの流儀に馴染んできたと思うわよ」

「マナカ！」

と、口の中に食べ物がある事に気が付いて言葉を切る。

「いや実際この子に人間らしい生き方を教えるのは大変だったのだ。まあそうする必要も無かったんだろうけど、この子は《式神》として生まれ変わってからこの方、ただの一度も食事や入浴をした事がなかったとか。」

「常世の裏側における現世において、人為によって歪められた自然である《瘧神》とその眷属を、本来在るべき自然に戻す強制力である《神人》の一部である《式神》ならでは在り方だが、それは自然であつても普通とは言えない。」

「なのでわたしは三年前、食事も摂らずトイレにも行かず入浴もせず、睡眠すら取らずに護衛と称して四六時中付き纏うこの少女にある命令を下したのだ。」

「つまり人であれと。」

「おかげでいっつも口煩かった母さんの気持ちも分かったかな。あんたってホント、手のかかる赤ん坊だったわね」

「……私はあの時ほど動物や無機物の《式神》を羨ましいと思ったことはなかったのに」

そう言ってもぐもぐと食べ物咀嚼するマギカを眺めて微笑む。

「で、本題に戻るけど……今日の召集はあんたがした事よね？」

「はい。少し長くなりますが、食べながら話しても構いませんか？」

こほん、と小さく咳払いしたマギカは自分のペースを取り戻そうとするかのように、努めて丁寧な言葉遣いで続けてくる。

「だから口の中に食べ物があれば話しても構わないってば」

無情に断言すると、くっ、と言葉に詰まる不思議な女の子。

「……分かりました。それでは断腸の思いで可及的速やかに食事を済ませます」

マギカは途端に凄まじい勢いで食事を済ませ、はあ、と物悲しげな溜め息をつく。

「……」

前から思ってたけど。この子、食い意地張ってるわ。

まあこの子に食べる事の素晴らしさを教えたのはわたしだから、今さら文句を言えた筋じゃないんだけど。

「？ ああ、マナカはどうぞゆっくりと食事を進めてください。主に喋るのは私ですから」

こぼこぼと玄米茶のお代わりを淹れて、続ける。

「マナカがこの家の当主として御前会議を経験するのは今日で二度目になりますが、その事で質問は？」

「ないわね。形式は違っけど、自然との同調は魔術の基本だし、倫敦にいた頃は毎日のようにやってたし」

「私たちが用いるのは法術ですがまあいいでしょう」

そう言いながらも「あまり異国の法則を持ち込まないように」と視線で訴えて、マギカは神妙な顔付きで話を進める。

「事の始まりは一月ほど前になります。……鞍形山の結界に綻びが

観測された日ですね。その日私は強い波動を感知して、それが《王》の呼び声である事を理解し、即座に人としての機能を停止して《世界》と一体化しました」

「ちよっと！」

「ご心配なく。機能停止は私が望めば直にでも復帰する一時的なものです」

こちらを安心させるためか優しく微笑するが有耶無耶には出来ない。

「それで復旧率は？ 正確な数字をお願いします」

「復帰直後は三割、次の日には七割、三日後には九割……今は完全に回復しています」

「ああ、だからあの日はあんなに調子が悪かったんだ」

あまりに珍しい光景だったから記憶に残っていた。

「まさかあんたがご飯を残すなんて、さ。わたししてつきり天変地異の前触れだとはかり」

「……そういう言い方は誤解を招く。貧しい次代を知る私は、食べ物を粗末にしたら罰が当たると固く信じているだけだ」

何でかこめかみに青筋をたてたマジカが言い訳しつつ、なお続ける。

「だが私の体調不良が天変地異の前触れという穿った見方は外れていない。世界と一体化した私は新たな災厄の発生を予感した」

「新たな災厄って……！」

「ええ、新たな《瘡神》がこの国に誕生するという事です」

……言葉もない。

マジカの言う《瘡神》とは、人為によって歪められ、それ故に人に災いを為す超自然的な現象を指す。

世界の在り方は自然であれという物だが、かつてこそ自然の一部だった人類の進化は世界の予測を超え、自然を歪める霊長にまで発展した。

そしてその欲望は凄まじくこの星を食いつぶすほどで、世界とい

う親の手から離れた人類は、時に世界そのものを歪めるほどの《自然ならざる場》を作り出してしまふ。

そうして歪んだ場の向こうから　世界の内側から呼び出されるのが《瘡神》だ。

人為によつて歪められた自然であり、世界法則であるそれらは、召喚の場を形成する負の想念によつて脚色され、人が恐れる姿となつて人に災いを為す。

「対策が要るわね」

対策は人と世界の二手によるもの。

既に述べたとおり、世界は自然である事を尊ぶ。故に歪められた自然である《瘡神》には世界の修正力が働く。

それが《神人》という世界法則の顕現。世界の内側から現れた世界法則の化身である彼らは《瘡神》に接触し、可能なら世界法則への帰順を促し、不可能なら殲滅して実体化の核を封印する。

そうして《瘡神》を封印した《神人》はその地に定着する。理由は《瘡神》を歪められた自然たらしめる負の想念が完全に浄化されるまで復活の危険があるからだ。

しかし常世の裏側である現世に留まる為に人の姿を借りた《神人》は、必然的に老化という自然法則に囚われ、神の名に恥じないその力も時の流れとともに劣化していく。

だから人の姿を借りた《神人》は彼らを崇める人と交わり、マレピトという強い力を宿した子を成して《瘡神》の復活に備える。

桐生家もその一つで、わたしこと桐生マナカは桐生家初代マレピトである《神人》倶利伽羅の子孫にして、彼と同格の力を持つと認められた二代目だ。

故に《瘡神》との戦いではわたしが陣頭指揮を執らなければならぬ。それが桐生家の二代目を襲名した桐生マナカの義務なのだが……。

「……ごめんなさい。どうしたらいいか思いつかないわ、わたし」
そのノウハウがわたしの中にない。

魔術の都倫敦で受けた英才教育は、主に一人の術者として大成する為のものであり、流石の《連盟》もわたしが宗家を継ぐとは予測出来なかったので、マレビトの当主としての教育は受けられなかったのだ。

無論この家を継いだ三年前から今まで何にもしてこなかったわけではないが、流石にまだ《瘡神》そのものと直接戦った事はない。

つまり、これが初陣。勝手が分からず困惑するのも当然だと思う。「貴女が責任を感じる事はない。その辺りを補佐する事も私の仕事ですから」

「それじゃ対策は？」

食事を摂る手を休めてしゅんと頂垂れたわたしに微笑み、マギ力はわたしの《式神》として言うべき事を口にする。

「その準備が昨日までのものです。世界と一体化した私は新たな《瘡神》が呼び出されるに足る場の存在を感知しましたが、それにどう対処するかは世界の防衛本能と言える《王》の意思を確かめずには始まらない。新たな《瘡神》の顕在規模が如何ほどか。その判明なくして新たな《神人》が派遣されるか、それともこの国に定着したマレビトだけで対処しなければならぬのかは判らないのです」

「でも《瘡神》って確か……」

「ええ、彼らは発生の原因である負の想念を体内に取り込む事で成長するため、誕生直後は概ね脆弱です。それがマレビトの普及とともに新たな《神人》の派遣が激減した理由でもあります」

「ようするに速攻で発見して叩きつぶせばいいわけか」

「はい。やはり貴女は理解が早い。助かります、マナカ」

やる事が見え、そして事態もそれほど逼迫していないと判明して安心し、食欲を取り戻したわたしは二枚目のトーストにマーガリンを塗り、ハムを載せて齧りついた。

一つの宗家が単独で事に当たらなければならなかった昔と違い、今は世界中のマレビトが《瘡神》の顕現に対処する《連盟》が成立している。

倫敦の大英博物館に本部を置くこの組織には、文字通り世界中の《鬼討組織》が参加している。例外は独自の組織が発展したバチカント、欧米への不信から《連盟》への参加を見合わせた中東の《鬼討組織》くらいだ。

「《連盟》には貴女の代理として既に話を通してあります。彼らは『主だった術者』を百名、『際立った術者』十名前後編成し、要請があり次第向かわせる用意があると」

「やった、それじゃ楽勝じゃない」

「楽勝とは言いませんが、私も大事には至らないと判断しています。事実、未曾有の災厄をもたらした大戦に手をこまねいた事への反省から提案された《連盟》が成立して以来、新たな《瘡神》の誕生が大事に至った例は無い。これが百年も昔となると《神人》でも容易に対処できない《天変地異^{タタリ}》級の災厄などざらでした」

と、何故か軽蔑したような視線でわたしを一瞥して湯飲みを探すマギカ。

そうしてもぐもぐと咀嚼したわたしはある事に気が付いて口を開く。

「それじゃ今日の会議って？」

「世界の方針を確かめる物です」

「ずず、と玄米茶を啜ったマギカが残念そうな顔をして肩を落とす。気持ちは分かる。長話がたたって、このトーストと同様に冷めてしまったのだろう。」

「その存在を私が感知した事から、新たな《瘡神》の顕現は日本、それも東北地方に限定されると思えますが断定は出来ない。昨日までの準備は《王》との接続可能な《場》を作り上げる事で、本日の御前会議は実際に《王》と接続して、その意思を確認する事になります。これは《神人》級のマレビトである貴女にしか出来ない難事です。負担をかける事になると思いますが、どうかよろしくお願いますマナカ」

「それはいいけど、御前会議となるとあいつらも参列するんでしょ

？ 連絡は？」

「それは既に私が……」

ん、と言葉に詰まったマギカを見て悟った。

「ねえ」

と、間を置いて呼びかける。

「はい。まだ何か？」

「それじゃ今まで私に教えなかったのって……」

「……出来れば貴女を巻き込みたくなかった。貴女はこの家の二代目として本当によくやってくれている。去年の夏に《連盟》の要請で参加した第七次トランシルヴァニア戦役の手並みもそうでしたが、本年初頭に出雲大社で行われた《路》^{みち}の修復が三日で終わったのも貴女の功績であると、宮司が甚く感心しておられました。が、しかし……」

「しかし、なによ」

「……以後の貴女の衰弱は目に余った」

「まあ、ね」

魔術といい、法术といい、秘蹟という、マレビットだけが可能とする超常現象。《神人》の末裔であるマレビットは自己を世界に接続、あるいはより深く埋没して一体化することで世界法則に干渉し、意のままに操る事が出来る。

だがそれは人の手にあまる奇蹟。何のペナルティーも無しにほいほい出来る事ではない。

考えてみるといい。生身の人間が《世界》というよく分からない物に接続するのだ。接続の度合いが深ければ深いほど生身の肉体は深刻な代償を支払う事になり、また、如何なる手段をもってしてもこの負債を踏み倒す事は出来ない。

わたしの場合《神人》の血が異常なほど濃い事もあって接続の負荷はそれほどでもないが、その代わりというべきか《世界》からの脱出……つまり自己の復帰が異常なほど遅れるのだ。

まあこの辺りは人をベースにした《式神》であるマギカと似たよ

うなものなのだが。

「ですから私は、本来《神人》にしか出来ない《王》との一体化を貴女の代わりに行えるほどの《場》を作れないものか試行錯誤し、可能なら私が《王》と接続してその意思を確かめる事で、貴女の負担を減らしたかった。ですから、私は マナカ!?」

最後まで言わせなかった。

「止めなさい! 食事中に何をッ」

ちゃぶ台を巻き込まないように注意して抱きつき、そのまま押し倒す。

「っ……戯れはここまでです、怒りますよマナカ……」

ああもう。なんていいヤツなんだろうって感慨もひとしお。

「まったく貴方という人は女性の身でありながら同じ女性を……それも自分の従僕を押し倒して何をしようと言うのだッ」

「別に何も……あれ、もしかして期待しちゃった?」

「き、期待とは何を……!」

「……何してんだお前ら?」

と、そこで聞きたくもない声を耳にして首を動かす。

顔だけを振り向かせたわたしの前に不愉快な姿を現したのは、予想通り。

「サダミツ。あんたこそ何しに来たのよ?」

「定章だ。それと質問したのは僕の方が先だろ? さっさと答えろよあいのこ」

……いい気分が吹っ飛んだ。

顔立ちこそそれなりに整っているものの侮蔑の表情を露わにして、あろう事がこのわたしを『あいのこ』呼ばわりする不愉快な面を張り倒してやりたくなる。

「見て判んないのあんた?」

「判るか馬鹿」

「そう。頭悪いのね、あんた」

侮蔑の表情に軽蔑の表情を返して断言する。

するとサダミツは余裕の笑みをひきつらせて……いい気味。何か言おうとして舌を噛んだ。

「……いいから答えろよあいのこ」

「なに怒ってんの、バツカみたい」

あんな質問に答える気はないと言わんばかりに立ち上がって睨みつける。

「……」

「……」

そうして睨みあうことかなりの時間、何故か身体を起こしたマギ力が溜め息をついて、言った。

「穴があつたら放り込みたい気分です」

だが彼女が何を言わんとしているのかは、よく分からなかった。

「それで何しにきたのよあなた。召集は正午なのにこんな朝っぱらから来ちゃったりしてさ」

「別に早く来ちゃいけない決まりなんてないだろ。嫌いなんだよね、何もしないで時間が過ぎるのを待つのもって」

そう答えて欠伸をする不躰な男を睨む。

こいつはサダミツ。桐生定章。本当はサダアキだけどわたしの中ではサダミツ。

五歳年長の従兄妹　と言つても近親婚しかした事のない桐生家の同世代は、みんな従兄妹になるわけだが、こいつだけは本当の意味での従兄妹。つまりこいつの父親はわたしの父親の弟ってわけ。

ようするに一族内の血筋においても、現実の地位においてもわたしの方が格上。なにしろわたしは桐生家の頭領なわけだし、年長の従兄妹とはいえ、サダミツごときの下風に立たなきやいけない理由なんてどこを探しても見当たらない。

「それよりお前のシキガミが感じた災厄の予兆とやらはどうなって

るんだよ？ もうとつくに解決してるんだつたら尊敬してもいいんだけどね、お前も」

なのにこいつは末席の分際でそんな事を言う。

「馬鹿言わないの。そう簡単に行くわけないでしょ」

「はん。ようやく教えてもらったにちや余裕があるじゃないか」

思わず台所で食器を洗っているマギ力を見てしまった。

「……すみません。一族の主だったものには連絡と、貴女への口止めを」

「そういう事さ。自分の流儀を大事にするものいいけど、少しは当主たる者の自覚つてもんを持つてほしいね。だらしない頭を持つて苦勞するのは僕たちなんだからさ」

そう言われると返す言葉がない。実際、件の接続の後遺症でマギ力が難しい顔をしていた時も「便秘かしら」としか思わなかったし、学校にも毎日通つてたし。

でも、別に遊び呆けていたわけではないだ。

ただ誰に何て言われようと父さんの言いつけ 要は自分の流儀を譲る気はない。

父さんは言った。自然である事と普通である事は同義ではないが、両立が不可能という訳ではない。酷く困難ではあるが、我々は人である。その事をマナ力、どうか忘れないでくれと。

わたしを身籠らせた母さんを捨て、桐生の家に戻ることを良しとしなかった父さんならではの言い付けを、娘のわたしが破るなんて論外の極致。

桐生マナ力はこの家の二代目であると同時に、桐生城西高校に通う普通の女の子でもあるのだから、誰に対してもそれを譲ってはいけないのである。

「何にやにやしてんだよ、お前」

「あんたの顔がおかしいからでしょ」

言つて、ティーカップに口をつける。

まあ言うほど悪いヤツでもないのだ、こいつも。

何しろ若輩の混血の分際で家督を継いだわたしに対する主だった一族の対応は、丁重な無視が基本。先代の遺言とその《式神》であるマギ力が居るからとやかく言う向きは起きていないが、今回の件だつて召集したのがわたしだつたら、良くて理由をつけての欠席が殆どだつただろう。

例外はこいつと、こいつの父親。あとは鞍形山の《眷属》けんぞくくらいだ。

それでも鞍形山の《眷属》が重視しているのは、当主であるわたしじゃなく桐生家そのものだし。こいつの父親が重視しているのは重鎮として面子としきたりだけだ。

「……まあいいさ。お前みたいになんくしゃでも一応女の子だし、子供の言う事に腹を立てるのも大人気ないしね」

そんな連中に比べてば、わたしの事を『あいのこ』だの『ちんくしゃ』だのと言つてくれるこいつの方がマシつてもんだ。

「で、結局何が言いたいのあんた？」

「お前みたいになくたれを従兄妹に持った僕は恵まれない星の下に生まれつて事さ」

「……そうね。たぶんアンタみたいな従兄妹を持つたわたしの次くらいに不幸なんじゃない？」

とは言え厭くまであいつらに比べりゃマシつて程度だ。選民思想に凝り固まつた鼻持ちならない従兄妹。加えて、わたしの事を『あいのこ』だの『ちんくしゃ』だの『あくたれ』だのと言いやがる、デリカシーの欠片も無い男とお近付きになりたいなんて思わない。

「今日は特に不幸だわ。朝っぱらからふざけた面を拝まされて、その上、話し相手になつてやらなきゃいけないなんてさ」

「……」

「失礼」

またしても余裕の笑みをひきつらせるサダミツの前に、デザート
の林檎を置いたマギ力は微笑み。

「林檎を剥きました。サダアキもどうですか？」

「……貰うよ」

何もこんなヤツに恵んでやることないと思うけど、まあこれくらいは許容範囲か。ぶっちゃけ毎年食べきれないで余らせてるし。

「しかし随分変わったじゃないかマギカも。以前はご神体の傍でぴくりとも動かなかったのにさ。なに、こいつとの生活は楽しい？」

「はい、概ね」

「そうかい。そりゃ良かったな」

「はい」

そんな会話を耳にしながら考える。

今までの事。そして、これからの事。

しやり、という林檎の食感が口に優しい。

願わくば桐生マナカも優しい人でいられますように。

会話の途絶えた居間の中、時計を見上げて確認する。

「あと二時間か」

この胸に湧き立つ不安が緊張に依るものだと願いながら。

とある世界の裏側の一家団欒

時間というものは、意識すれば意識するほど、遅々として進まないように出来ているらしかった。

時刻はまだ十時半。

十時のおやつが終わってほんの数分しか経っていないのに、居間の柱時計を見上げては溜め息をついてばかり。

目の前でへらへら笑ってるヤツじゃないけど、何もせず時間が過ぎるのを待つだけっていうのは疲れる。

「ところで、あんた」

他にする事もないので仕方なく、わたしはふざけた晒い方をする男に話しかける事にした。

「ん、僕の事かい？」

「他に誰が居るのよ」

驚いた風に眼を瞬かせる男をジト目で睨んで言い切る。

まことに残念ながら純和風のリビングには、本当にわたしとこいつしかいない。

わたしの従僕しもべであり守護者であるマギカは箒で庭を掃いてるので不在。まあ、あの子はわたし以外に人が居ると、必要最小限の事しか喋らないんだけど。

理由は、何でも「これ以上ボ口を出したくない」からだとか。相変わらずあの子の持って回った言い回しは難し過ぎてよく分からん。「ふうん？ お前のほうから話しかけてくるなんて、いったいどういう風の吹き回しだいたいって言いたいところだけど……おおかた僕を無視するのに疲れたんだろう？ ああ、気持ち分かるよ。僕だって噂アナスタシアに名高い《星の聖女》みたいな美人が目の前にいたら、たとえ相手にされないって判っていても無視するのは難しいからね。でも安心しろよ。僕は心が広いから、お前みたいな阿婆擦れの小娘に話

しかけられても無視なんてしないよ」

……こいつの言い回しは奇天烈すぎてワケ分からん。

何でか知らないけど、こいつと話していると目眩がしてくるのよね。

「ま、あんたがそういうヤツだって知ってたけど」

「なに、僕がいい男だって言ってる？」

「……馬鹿ね。そんなわけないでしょ」

やっぱりこいつに話しかけたのは失敗だったか、と早くも一回目の溜め息。

「けど、さ」

「けど、なによ」

なんて思いつつも律儀に相手する。

自分でも、目眩がするなら相手しなきゃいいのになって思うけれど、一度なにかを始めたなら手応えを感じるまで終りに出来ないのがわたしの性分なのよね。

「僕と二人きりなれて少しは期待してない？」

「あんたに期待する事なんて何も無いわよ」

「よく言うよ。実はこっそり期待してるくせに」

「……」

なので深みに嵌ることが多々ある、と二回目の溜め息。

いったいわたしは何をしているのだろう、と遣る瀬無い気持ちで続ける。

「それより……えーと、なんだっけ……」

「なんだよ、人に話しかけておいて用件を忘れたのかよ？ 本当に仕様が無いヤツだねお前は。ほら、そんなに慌てなくていいからゆっくり思い出しなよ」

続ける積もりだった言葉をど忘れして、会話に困るわたしを落ち着かせる穏やかな声。

……これだからこいつは苦手だ。

何故かわたしに拘るこいつは何故かわたしに優しい。

「あんたって本当にワケが分からないわよ」

聞き取られないように小声で呟いて、しみじみと三回目の溜め息をついたあと。話の腰を折られる前になんて言おうとしていたのか思い出そうとしたら、それは自分でも吃驚するぐらいすんなりと頭の中に浮かんできた。

「……とりあえず聞きたい事があるんだけどいい？」

これは軽くパニックだったわたしを落ち着かせてくれたこいつのおかげ、という事になるのだろうか。

「ああいいよ。何でも聞きなよ」

無駄に自信満点の笑顔で安請け合いする桐生定章。じゃない、サダメツ。

こいつは悪いヤツじゃないけど、

「で、そんなに申し訳なさそうな顔して聞きたい事ってなんだよ？なに、ひよつとして小遣いが足りないとか？もしそうなら恵んでやるから遠慮するなよ。貧しい庶民に施すのは選ばれた貴族の義務みたいなものだからさ」

……やっぱりそこはかたくむかつくわね。

特にその顔。いやらしいたらありゃしないわ。

そんでもってその財布。すこぶる入ってそつで羨ましいぞこんちくしょう。

「そつじゃなくて！あんたさ、さつき自宅で待つのは嫌いみたいなこと言ってたでしょ」

男にしては華奢で繊細な指先で数枚の福沢諭吉を取り出すのを見て、貰える物は貰っておこうかしらという誘惑に駆られる情けない自分を一喝して、後ろ髪を引かれる思いでどうでもいい本題にはいる。

「ああ、時間になるまで時計を眺めて過ごすのは好きじゃないんだよね」

すると鼻持ちならないこの男は「何、勝手に切れてんだよ馬鹿」と言わんばかりに口元を歪めて吐き捨てたのであった。

「そつ……」

その態度にカチンときたわたしは徹底抗戦を決意する。相手が誰であれ、やり返さずにはいられないのもわたしの性分なのだ。

「なのに早めに出かけて待たされるのは嫌いじゃないの？」
暗に待つのも待たされるのも同じなのに、何詰まんない事に拘ってんだかと言ってみる。

これで無駄に爽やかな笑顔をひきつらせてくれれば面白かったのに、右手で頬杖を突いた男は「分かってないね」と左手を振って答えた。

「同じじゃない。僕は待つのは嫌いだけど、待たされるのは嫌いじゃないんだ」

「これまた妙な拘りを……。」

「ふうん」

と、適当に言葉を濁して徹底抗戦を断念、興味を持ってない会話を打ち切るためにそっぽを向く。

だっていうのに空気を読めない男は「同じじゃない」と蒸し返して、

「待たされるっていう事はさ、そいつを待たせてるやつが待つだけの価値がある相手じゃなきゃ成立しない状況だろ？ だから僕は待たされるのは嫌いじゃないんだ」

そう言って、視線を戻したわたしの前で苦笑した。

「……」

それはいつもの人を小ばかにしたような笑みじゃなければ、どこか自分に酔っている風な自信過剰な薄ら笑いでもない。

まるで子供のときの夢を語ってしまったことに気が付いて、照れ隠しに微笑んでいるかのようなその表情。

「なんかデートの待ち合わせの話みたい」

特に意図せず口にしてから、そういう事かと納得した。

「どこがデートの待ち合わせの話なんだよ？」

こちらの話に付いていけなかったのか、サダミツは訝しげに眉を

ひそめるが、そう返した言葉にいつもの毒気はなかった。

それで確信した。

つまりこいつは懂れているのだ。

「だってそうじゃない。あんたを待たせてるヤツってあんたの好きな人の事でしょ？ そうじゃなきゃあんたみたいな癩癩持ちが素直に待ってられるわけじゃない」

「あ」

くすくすと笑みを漏らす。

あんたはどこの純情少年だって言いたくなるほど赤面したサダミツが、何か無性におかしくて仕方ない。

「……言われてみればそういう風に聞こえるよな」

「そういう風にしか聞こえないってば」

言って、紅茶を注ぎ足す。

「……僕がそういう風に思っているってバレちまったか」

そうして二杯目の紅茶を堪能しつつ様子を窺うと、何故か赤面したその男は観念したようにポリポリと頭を掻いて目を逸らした。

その仕草を可愛らしいと思ったわたしは笑顔で続ける。

「まあいいんじゃない？ 好きな人がいるって事はそれだけで幸せな事よ」

ああ、おかしい。まさか腐っているとしか思わなかったサダミツの性根が、こんなにも純真だったなんて。

「だったら、さ。もし良かったら、後でしんがりだい殿台の駅前にも遊びに

」

「まあどこのどいつが好きなのかは知らないけどさ。頑張ってデートに誘ってオーケーでも貰いなさいよ。気分がいいから応援してあげるわ」

と、紅茶を飲みながら言つと、

「……」

何故かこいつはピキツと硬直した。

……まるで石化の魔術をかけたかのように。

桐生定章は照れ笑いしたままピクリとも動かなくなった。

「？」

どうしたんだろう、と目の前で手を振っても反応しない。後ろの箆笥に纏めてある雑貨用具からマジックを取り出して、おでこに「肉」と書いてもダメ。ちょび髭と眼鏡を書き足してもダメ。

「……」

もういいや、サダミツなんて放っておこう。

「……おい」

そして、時間にして数分後。する事も無くなって欠伸するわたしの意識を呼び戻す声。

「なに？」

人の機能を取り戻した不細工なオブジェに答える。

「『なに？』じゃない。おまえ今の会話に不自然な流れがあった事に気が付かなかったのかよ？」

「今の会話に不自然な流れ……？」

むむむ、と一連の会話を頭の中で繰り返してみるのが、サダミツの言う不自然な流れとやらの見当は一つしか付かない。

「……もしかしてあんたって童貞でしょって指摘しなかったこと？」

「どうして僕が童貞なんだよッ」

「だって今まで女の子と付き合ったことが無いからデートの誘い方が分からないけど、デートのオーケーを貰った場合をシミュレートするのは好きだっていう話だったじゃない」

「人の話をどこまで歪めりゃそんなふざけた結論になるんだ……！」

パンツ、とちやぶ台を叩いて立ち上がったサダミツを疎ましげに見やっつて忠告する。

「別に成人式なんてとっくの昔に終わってるのに童貞だっていいじゃない。結果論になるけど、結婚するまで純潔を守るのも一つの生き方だから変な風に思わないわよ、わたし」

「だから！ どうしてこの僕が童貞なんだよッ」

ああもう、やっぱしこんなヤツに構ってやるんじゃないかった。

「僕は桐生定章だぞ？ 桐生財閥の御曹司だぞ？ 言い寄る女はごまんといて、毎回あしらうのに苦労しているモテ王のこの僕が、どこをどう間違ったら女日照りに苦しんでるみたいに言われなきゃならないわけ!？」

「嘘ばっかし。あんたが女の子を連れてるのなんて見た事ないわよ、わたし」

「だから好きな女の子がいるから断ってるって言うてるだろッ」

「はいはい。面倒くさいからそういう事にしといてあげるわよ、もう」

ともすれば脱力のあまりちゃぶ台に突っ伏しそうになる顔を両手で支え、四回目の溜め息をつきながらそう答える。

そして、もう、あんたと話す事は何も無いと言つ風に両目を閉ざす。

「何を騒いでいるのです二人とも」

庭の掃き掃除をしてくれたマギカには悪いけど聞こえないふりをする。

「おいマギカッ」

「? その顔はどうしたのですかサダアキ」

「いいからこっちに来て……!」

するとサダミツがマギカに詰め寄り、そのまま廊下に連れ出す気配を感じ、

「……」

流石に無視出来なくなつたわたしは、こつそり聞き耳をたてる事にした。

そうして耳朵を微かに震わす会話の中身を吟味する。

「あいつは一体どこまで本気なんだ!？」

「あいつとはマナカの事ですか？」

「そうさ! あいつは一体どこまで本気なんだよ!？」

「話が見えませんが、もし彼女に何か言われたならご愁傷さまとしか言えません」

「……………」
「彼女は何時だって本気です。その事を直に体験した私が言うので
すから間違いありません」

「……………」
「泣いてはいけません。強く生きるのですサダアキ」
「けどやっぱりと言うべきか、普通の物差しで測れない二人の会話は
どうにも要領を得ない。」

「……………」
まさかわたしに内緒で出来てるって事はないと思うけど、不
安だ。

「ん」

と庭に出て身体を伸ばす。

時刻は十一時半。

厚い雲に蔽われた空は暗く、否応なしに到来の時間が近い事を意識
させる。

「そろそろか」

視線を南西に向けると既に雪が降っているのか、鬼が住まうとさ
れる鞍形山くしなりやまは白い雲海に閉ざされて何も見えない。

「本当に見ただけで何が起こってるのか判るわね」

「彼らもまた、存在そのものが自然現象ですから」

和服に着替え、縁側に顔を出したマギ力がわたしの独り言に付き
合う。

「天気予報で今日は曇りだって言ってたけど、まさかあいつらの所
為で外れたりはいらないわよね？」

「それは無いかと。太古の盟約により、彼らが下山する時は人目を
避ける隠行の呪符と、自然への干渉を最小限に抑える封印の呪符を
身につける事になっていきますから」

そうは言っても未だに納得できないのだろう。調伏に応じたとは

言え、本来であればえやみのかみ瘡神の従僕である彼らを討つ為に創られた《式神》であるマギカは、正視に耐えない光を閃かせた視線を大荒れの鞍形山に固定して動かない。

……そんな彼女を不憫に思いつつも言わないわけにはいかない。

「マギカ」

と声をかけて縁側に腰掛け、鬼火のような物をちらつかせる《式神》の視線をわたしに向けさせる。

「何か？」

「こつちにいらっしやい」

そうしてわたしの隣を指差しながら命じると、彼女は一言の不満も差し挟まずに従った。

「……」

一切の詮索を自らに禁じる少女の肩を抱き寄せて、されるがままに身体を預ける彼女の表情を確かめたわたしは。

「彼らが許せない？」

桐生マナカは桐生マギカの主君として、訪ねるべき事を訊ねた。

「……いえ。彼らもまた《瘡神》の犠牲者ですから」

そう答えるまでにかかった時間が痛ましい。

「マギカ」

もう一度、彼女の名前だけを口にして、彼女の額に触れるだけの口付けを与える。

「マナカ……」

そして自分の唇に人差し指を当て、何も言わないで、とだけ伝えて静かな抱擁を続ける。

「……」

無言で体を丸めるマギカの頭を慰めるように撫でる。

わたしは彼女の過去を識っている。

彼女は何にも言わないけれど、それでも桐生マナカは、自らの従僕であるマギカの過去を知識として継承しているのだ。

人の身で《式神》に為った少女。人の身で《式神》にされた少女。

四百年も昔、名君の誉れも高い陸奥桐生初代藩主桐生正長統治下の平和な農村で、多くの家族に囲まれて幸せに暮らしていた少女が人ならざる《式神》に為り変わった事実。わたしはそれを憐れむ心算はない。

彼女が故あって《式神》しきがみとして生きる事を選んだ人間なら、わたしもまた故あって《神人》まろこいびととして生きる事を選んだ人間だ。

だからわたしが憐れに思うのは、そうする事しか選べなかった少女の理由。それが堪らなく辛い。

「……」

その選択ゆえに疎まれて、蔑まれて、辛い思いをする事になっても、その選択が間違っていたと後悔する事だけは無いと時を止めた少女。

元凶は封じられ、それに加担した者たちも滅び去り。

原因は忘れられ、それに加担した者たちが滅び去っても。

彼女は時の流れに取り残されて、過日の妄執に囚われたまま。

「……来たわね」

「はい」

気持ち切り替える。そうする事が必要なら、自らに課した役割を完璧にこなせる人間がわたしだ。

「わたしがあいつらと話しをするから、あんたは余計な事を言わない。出来るわね？」

「はい」

もう一度マギカの額に唇を押し付けて立ち上がり、広大な桐生邸の敷地を見渡して歩く。

「本当にうんざりするほど広い庭だわ」

石垣と木材で組み立てられ、漆喰で塗り固められた塀と正門から玄關まで200メートル以上という馬鹿げた距離。500メートル四方はあるかという中庭と、周囲を取り囲む深い竹林と険しい丘陵地帯。それらすべてが桐生邸の敷地だと言えば、うんざりする気持ちも分かってもらえるだろうか。

「……まったく。少しは管理する側の気持ちになれ」

「それは実際に管理している私を思つての発言でしょうか？」

憎まれ口を叩けるほど回復したマギカに微笑み天を仰ぐ。

黒い雲と白い靄に覆われた空に浮かぶ小さな点が、次第、次第に大きくなる。

数は無数。数える気になれないほどの影が鳥のような、そして人のような輪郭を得て桐生邸に舞い降りる。

盛大に宙を舞う木の葉と砂塵の中、轟風を纏って舞い降りたソレらは姿を現した。

「ご苦労様。今日は召集に応じてくれて有り難う」

吹き付ける土埃を無視して労いの言葉をかける。

鳥のような翼を持ち、人のような五体を持つその姿は、しかし断じて鳥ではなく、かと言って人でもない異形の群れ。山伏の装束に身を包み、一本歯の高下駄を履き、頭をすっぽり覆う編み笠を被り、葉団扇を手にして立ちつくす彼ら。

その中から一人の「老人」が歩み寄り、編み笠を外して口を開く。「儂ら呼び出したのはそちらの嬢ちゃんだがの」

にやり、と下卑た笑いを浮かべたその顔は朱を塗りたくったような赤ら顔で、もはや何かの冗談としか思えないほど高い鼻の長さは三十センチを下らない。

それは人の世に災いを為す《瘧神》の従僕。鬼の《眷属》けんぞくである妖怪でありながら《神人》の調伏に応じてマレビトに協力するもの。桐生家初代俱利伽羅クリガラと盟約を結び、鬼を封じた鞍形山に根を張ることを許された三種族の一画、天狗である。

からからと下駄を鳴らしてこちらに來た老人はわたしを見て、そしてマギカを見て殊更好色な笑みを浮かべて口を開く。

「それで用件は？ 昔のようにまた儂らと遊んでくれるのかの？」

赤黒い口腔から酒気とともに漏れた聞き違いようのない嘲弄に、累々と肩を並べる天狗たちが呵々大笑する。

「……貴様らッ」

マギカが纏った空気が変わる。彼女にとって彼らは仇敵。故郷の村を滅ぼした、親しい隣人を手にかけた、愛する家族を手にかけた、そして……。

「趣味が悪いわよ豹部。その鼻をへし折られたいのかしら？」

殺気立つマギカを片手で制したわたしは舐るような視線を向けてくる、好色な天狗の長である老人を冷たく睨んで言った。

「冗談じゃ。儂らとて人の身で俱利伽羅の《式神》となった其奴に相手をして欲しいとは思わん」

そうは言っても下卑た笑みは変わらず、そしてそれは豹部ひとりだけのものではない。集いに集った天狗たちの好色な視線は嘗め回すようにわたしたちの身体を這う。

「だったら少しは礼儀を弁えなさい。これ以上わたしたちを侮辱する気ならこっちにも考えつてもんがあるわよ」

不快な視線を片手で払ってピシヤリと断言する。

「ふむ、考えとは？」

サダミツのそれが可愛く思えるほど不快な表情を浮かべて、長く縮れた髪と同色の白い顎鬚をしごく老人を睨みつけたわたしは、とつておきのアイデアを披露する事にした。

「《エルダー克蘭ク連盟》から棲み処を追われたハルピュイアを引き取ってもらえないかって話が来てるんだけど、どう？ 鞍形山で受け入れてみる？」

にっこり笑って提案すると性格の悪い老人は狼狽も露わに「冗談ではないぞ」と吐き捨てた後、ばつが悪そうにもごもごと口籠って探るような視線を向けてきた。

恐らくわたしが本気かどうか知りたいんだけど、残念。マギカも言っただけで、わたしは何時だって本気だ。

「今後一切わたしたちを侮辱しないって約束するなら、わたしの権限で断つてあげてもいいけど？」

そしてこの家の管理下にある天狗たちに拒否権は無い。

「……約束しよう。受け入れ拒否の件、くれぐれも間違いのないよ

うに頼むぞ」

その事を十分に読み取れたのだろう。豹部翁は観念したように肩を落として嘆息した。

「それじゃ仲直り。マギカにきつちり謝罪して」

「……済まなんだ。互いの『過去』を蒸し返したのは戯れにしても行き過ぎだった、許せ」

「謝罪は確かに。今後は互いにこの話を持ち出すのは止めましょう」
対等の立場で互いの無礼を詫びあう二人の姿は、しかし、すごすごと退散する老人の姿と、毅然と胸を張る少女の姿を比較すれば、どちらに軍配があがったのなんて幼児が見ても判る。

「マナカ」

わたしの左手をガツチリ握ったマギカが小声で囁く。

「お見事でした」

「……気持ちは分かるけど。」

ホントに嬉しそうね、この子。

「……着たわね」

八つ当たりがてらに一族を叱り飛ばす豹部翁の後姿を満足げに眺めていたわたしは、桐生邸正門前に停車したマイクロバスに気付いてマギカの様子を窺った。

「何か？」

わたしに視線を返して姿勢を正す少女は、拍子抜けするほど平素いっそも通り。マイクロバスの到着に気付いた時も僅かに一瞥しただけで、その仕草に仇敵である天狗たちに見せた強烈な敵愾心は微塵も存在しなかった。

「あつちはそんなに怨んでいないの？」

マイクロバスにあごをしゃくって訊ねる。

するとマギカは何とも言えない困り顔で口元を緩め、

「彼らは鬼の悪事に加担しなかった妖怪ですから」

そう、マイクロバスからわらわらと降りてきた『園児たち』から目を逸らして答えた。

「いやいやいやいやいや」

……まあ目を逸らしたくなるのも分かる。

我ながら完璧な偽装だと思っけど、幾らなんでもこれはあんまりかなーと。

「いやいやいや。どうやらお待たせ致しましたようで申し訳ないご当主殿！！」

一系乱れず統率された大量の園児を率いる先頭の太っちょ園児が、ビシッ、と腰を直角に折り曲げて頭を下げるのを見て後ろの園児たちもそれに倣い、

「まだ時間まで大分あるけど……帽子落ちたわよ」

そして当然の成り行きとして、先頭の太っちょを始めとする園児たちのハンチング帽が地面に落ちたのである。

「おお、これは申し訳ない！ いや、とんだお恥ずかしい姿を！！」

そうして露わになった頭頂部のお皿を水かきのついた手で撫で回して、幼稚園児のコスプレが嵌りすぎるほど嵌った集団は恥ずかしそうに笑った。

そう、何を隠そうこの『園児たち』こそ鞍形山に《瘧神》である鬼を封じた三種類の一画。たぶんこの国で最も有名な妖怪。

「まったく、帽子のあご紐をかけ忘れおって。これではご当主殿に申し訳が立たぬぞ」

「爺さまもかけ忘れてたくせにー」

「そつだそつだ。爺ちゃん最近太りすぎだぞー」

「うぬう……ああ言えばこう言う可愛げのない孫たちだな」

……河童である。

直立した人面亀さながらの容姿は、頭頂部のお皿とカルガモのようなくちばしのおかげで非常にコミカルかつラブリー。

……いや、まあ。

マヌケ以外の何物でもない園児服さえどうにかすれば、それなりに威厳のある集団なんだけど。

「……ねえその園児服、そろそろ卒業する気はない？」

「何を仰いますご当主殿！ この服は里人が我ら河童族の為に考案したとしか思えない逸品ですぞ！！」

唾を飛ばして力説する汗かきの太つちよに「うんうん」と同調する河童たちを見て、説得ないし罪滅ぼしを早々に諦める。

「それもこれも斯様な逸品を我らに贈呈してくださいださったご当主殿の格別の配慮があつてこそ。おかげで我ら河童族はこうやって紐を啣えて嘴を作り物に見せかければ里人と交流する事さえ可能になりました！ 河川の汚染に悩む我らに新たな未来をお示しになられた桐生家二代目当主末那伽様に心から感謝を！！ ほれ、お前たちもお礼を言いなさい」

「心からの感謝をー！！」

……何も言うな。

わたしだって冗談のつもりだったんだ。

「つきましては感謝の気持ちとして……おお、それだそれだ。圭樹、杏奈、お土産をお持ちしなさい」

「はい爺さま」

汗かきの太つちよ……河童族の長老、玄爺の言葉とともに「てと」と飛び出してくる河童の姉妹。

いや、あまりにも微妙な嘴さえ気にしなければ子供みたいで可愛いんだけどさ。

「末那伽姉さま、真偽迦姉さま、お土産ですう」

「ふむ、こちらの燻製は？」

「里で獲れる鮭を燻製にしたものでして、何でも里人の間では『すもーくさーもん』と呼ばれて持て囃されているとか。いや、このような物しか献上できず汗顔の至りですが」

「何を言うのです玄爺。三年ぶりに顔を合せたと思えば過去を蒸し返す天狗たちの気性の荒さに悩まされた私たちは、貴方たち河童族

が見せた礼節と友愛の精神に涙を堪えるのに必死だ……！」

「ほう、天狗たちが我らの大恩人に無礼を？ それはいけませんなあ」

と、両目をキュピーンと光らせて同胞を睨む玄爺と、それにキュピーンと做う河童たち。そして慌てふためく天狗たち。

こう見えても河童たちは強い。それも凄まじく。

「何ぞ弁明はありますかな豹部翁」

「その件は謝罪して和解したばかりだ玄爺」

天狗が山神なら河童は水神。三方を山に囲まれているとは言え、鞍形山より流れる鬼泉川の終着点である桐生邸で戦えば天狗たちに勝ち目はない。

だが無論、そんな私闘を認める訳にはいかないのがわたしの立場なのだ、わたしの。

「豹部の言う通りよ玄爺。マジカも過去を蒸し返さないって約束したばかりでしょ」

じろり、と血気盛んな二人の老人と不届きな従僕を睨む。

「いえ、私は義理堅い河童たちを称賛しただけで……済みません」

「三年前に見たときは乳臭い小娘だったが……女は化けるの玄爺」

「人を見る目がありませんな豹部翁も。我ら河童族は三年前の時点でこれあるを予見しておりましたぞ」

何か口々に勝手な事を言ってくれる一族（マジカも含む）に背中を向け、頭を抱えて、まったくどいつもこいつもと言ってやりたい気分が続ける。

「それより玄爺」

「はい、ご当主殿」

「あの姉妹は？ あんたたちと一緒にじゃなかったの？」

「いやいやいや。あの姉妹は車の中で暑い暑いと言っておりましたからな。今頃蒸発して影も形も無くなっているかも知れませんが、なに、放っておいても大丈夫でしょう」

「大丈夫じゃない！ 手を貸しなさいマジカツ」

「は、はい！」

……本当に。」

この家の当主たるもの悩みは尽きないのである。

「ホント酷い目に遭った！ もう、河童たちの体臭が充満して死ぬかと思っただからッ」

「うん、本当に蒸し暑くて、とつても臭かったんだよ末那伽。真偽迦も有り難う。あー、生き返るわあ」

バス内の暑さと息苦しさのあまり、哀れにも手の平サイズに縮んだ氷の塊を撰氏マイナス18度の製氷機に押し込んで数分後。ようやく人のカタチを取り戻した双子の姉妹がにこやかにお辞儀をする。「……そんなに縮んじやって大丈夫なの二人とも？」

「暑さ対策で存在濃度を低下させただけだから大丈夫だよ末那伽」
「とりあえず封印の呪符を外していい？ そうすれば直にでも元通りになるんだけど？」

そしてわたしの肩に飛び乗って勝手なことを言う。

「却下。というかあんたたちがそれを外したら、ここいら一帯氷付けになって大変な事になるでしょ」

「やーん、末那伽のいじめっ子ー！ 氷雨悲しいー、氷柱もそうでしよー！？」

「横暴当主！ サドっ気たっぷりの末那伽なんてマゾっ気たっぷりの真偽迦をひいひい言わせて幸せになつてしまえー！！」

「誰がサドっ気たっぷりよ」

「誰がマゾっ気たっぷりだ」

「「いやーん、二人とも怒っちゃやー！」」

二人して頭を抱える。

この性格の悪い姉妹は言うまでもないと思うけど、かの高名な雪女である。

鞍形山に鬼を封じた三種族の一画にして、最後の生き残り。双子の姉妹は現存する最後の雪女なのだ。

「はいはい。封印の呪符を外すのはダメだけど、その代わりについてらっしゃい。後で奥の霊地を使わせてあげる」

ぐりぐりと双子の頭を人差し指で撫でてつけて寛大な処分を決定する。

「きゃー、末那伽サイコー！」

わたしの顔に抱きついて頬擦りする仲良し姉妹。ひんやりして気持ちいいのは良いんだけど霜焼けになりそう。

「いいから奥に着くまで大人しくしてなさい。あんまりべとべとすると融けるわよ」

「はい」

仲良くわたしの両肩に腰を下ろした姉妹の頭を、最後にもう一度だけ撫でて製氷機を閉じる。

「でも奥の霊地って私たちが使っちゃって大丈夫なの？」

「そうだよ末那伽。あんた、またあいつらに嫌味言われるよ？」

「大丈夫、今のわたしは先代の《神人》桐生俱利伽羅から正式に全権を譲渡された《神人》桐生末那伽。つまりわたしがこの家のルール。それに文句があるなら上等よ。いくらでも勝負してやるわ」

奥の霊地は、本来《神人》級マレビトしか立ち入る事を許されないとされる聖域だが、絶滅危惧種を保護するためなら例外も認められるだろうし、今の所有者はこのわたしだ。あれこれ反対する方がどうかしている。

「やーん、末那伽サイコー！ ハンサム、カッコいいー！」

「それって全然褒め言葉になってないわよヒサメ、ツララ」

「なら社長さん男前やねえーってのは？」

「ランク上げんな」

「……」

なんて遊んでたら、何故かマジ力が曰くありげな視線を向けてきた。

「なに？」

わたしの決定に不満があるのか気になって訊ねてみると、彼女は肩をがっくりと落として言った。

「マナカはこの二人に甘い。雪女は貴女が思っているより遙かに残酷で気紛れな妖怪なのですよ」

「「本人の目の前で言うかなそういう事」」

「本人の目の前だからこそ言うのです」

そして双子の姉妹のブーイングに柳眉を逆立てて断言する和服少女は若干赤髪。どうやらマギカは河童たちほど雪女に気を許していない様子。

「そんなに目くじら立てないでよ」

何とも気難しい従僕にひらひらと手を振りつつ、にっこり微笑つてこの台詞。

「もしこの子たちが何か良からぬ事をしようとしたら、その時はきつちりおしおきしてあげるから」

すると双子の姉妹がピキツと氷付けに。

「ヘンなの。笑わせてやろうと思って言ったのに凍り付いちゃったりしてさ……マナカもどうしたのよ、そんなに震えちゃって。寒い？」

「……マナカ。初めて貴女を怖いと思った」

訝しげに訊ねるわたしに答えたマギカの言葉を頭の中で反芻して、ああ、と了解した。

「本気だと思った？」

「はい」

まあ結果オーライでしょ。

いざという時にそれぐらいの事を言えなければ、世界の裏側に跋扈する怪異と向き合うマレビトの宗家は務まらないだろうし。

まして……。

「あと五分か」

桐生家に従う《眷族》より遙かに性質の悪い『曲者』の思惑を考

えれば尚更である。

「あー、くそ。マナカのやつ、人の顔にマジックで落書きするか普通……」

何でか洗面所に籠もってジャブジャブやってたこいつの父親が従える桐生家の面々。

「彼らも到着したようです。マナカ、準備を」

「……何だよ。親父のやつホントに時間ぎりぎりかよ」

天狗族を統べる豹部翁がマギカの仇敵なら、桐生家の《鬼討師》を統べるあいつはわたしの仇敵。

正当な跡継ぎである兄を異国の女性と通じた罪という馬鹿らしい理由で追放し、家督を奪って財産を私物化した俗物。

桐生邸沿いの私道に所狭しとベンツを並べて、我が物顔で桐生邸に足を踏み入れる黒服どもの先頭を歩く当代補佐役。

「父さんと母さんの葬儀にも参列しなかつたくせに、よくも我が物顔でこの家の敷居を……！」

「いけない、堪えるのですマナカ」

「おい、何も相手にする事ないだろ」

わたしの為を思って止めようとしたマギカには申し訳ないけど我慢できない。わたしの堪忍袋の緒はあいつの顔を見た瞬間に切れてしまった。

「」

あれから三年。不慮の事故で他界した両親の葬儀に参列しなかつたにも拘らず、《王》の御前で執り行われた継承の儀に参加したあいつ。その理由を訊ねたわたしに「この家から追放されたお前の父親は、その処分を見直す此度の御前会議への参加を以って恩赦を賜る予定だったが、それ以前に死去した為に未だ追放処分を解かれていない。それがお前の両親の葬儀に参列しなかつた理由だ」と答えたあいつ。ああ本当に結構な正論ですこと。

「宣言！」

「末那伽か。久しぶりだな」

ツカツカと歩み寄るわたしを出迎える無情な声。

身の丈二メートルほどの筋骨隆々とした長身。《連盟》の格付けで世界第三位の術者と認定される傑物。戦後の高度成長期に地方財閥だったこの家を一躍財界トップに押し上げた辣腕家。変化と停滞矛盾する二つの性質を整合して現代に適応したマレビトの極み。

「時間ぴったり、と言っているのかしらね叔父様」

「そう言うのに何か不都合でもあるのか末那伽」

桐生宣章の登場である。

わずかに赤みがかった黒い瞳で傲然と見下す仇敵の前で、精一杯に肩を怒らせて腕組したわたしは次の言葉に迷った。

こいつを呼び止めたのも特に考えがあつてした事ではない。

むしろ考え無し。ついカツとなつてやった、というヤツなのかもしれない。

「して何用だ末那伽」

けどこいつに弱みを見せるわけにはいかない。

当主の面子なんてどうでもいい。

ただこいつの事を一度たりとも悪く言わなかつた父さんの為にも。

「やめるマナカ。親父もやめてくれ」

「やめるとは何の話だ定章。末那伽も私を呼び止めた以上、何らかの用向きがあるのだろう。それをお前の一存で有耶無耶にする気が？」

「だからそんなに追い詰めるような事を言うなよ。マナカだってさ、別に喧嘩を売ってるわけじゃ」

そう意気込むわたしの前に割り込んだサダミツは、こう、むにゅつとわたしを押し退けて父親に食い下がった。こう、むにゅつと。

「……」

自分の身体である。いつたどこを触られたのかなんて見なくても判る。

「……」

さてどうするか、と頭の中で簡易法廷を開く。

被告と弁護士が欠席したまま結審された判決は、当然の事ながら有罪。情状酌量の余地なしと陪審員も同意する。

「……サダミツ」

「いいからお前は黙ってるって……えっ!?!」

呼びかけて、こちらに振り返ったサダミツの顔に理解が広がるのを待つて罪状を言い渡す。

「『えっ!?!』じゃないでしょ？ なに人のおっぱい触ってんのよあんだ」

「あ……いや、これは……」

自己の罪深さに気が付いて狼狽する被告は、しかし、何故か、さり気なく手の平を丸めてきた。

それが意図したものか、そうでないのかなんて知らない。

ただ服の上からとは言え、よりもよって宣章の目の前でそうした事が許せなくて思考が沸騰した。

「「うわあ……」」

と、いつの間にもやら復活していた双子の姉妹が怯えたように漏らす。

然もありなん。わたしの膝はもはや弁解の余地もない痴漢の股間に叩き込まれたのだ。

「……やり過ぎですマナカ」

斯くして白目を剥いて悶絶し、崩れ落ちるサダミツの頭を踏みつけるわたしを諫める声。

「なんでよ。人のおっぱいを勝手に揉んでくれたんだからこれくらい当然でしょ」

それに毅然と反論すると同時にとびっきりの殺し文句を思いつき、これ幸いと即座に実践する。

「よく出来た息子さんですこと」

とびつきり憎たらしい顔を作って皮肉るが、宣章自慢の鉄面皮は変わらず。

「自慢の倅だ」

食えない叔父は一連の経緯を総括するように、呆れるほど厳かに頷いてみせた。

「……本気でそう思ってるの？」

流石にそれはないだろうと、足元の芋虫をつま先で突付いて問い質す。

尺取虫のように腰を浮かせて地べたを這う男は無言。言葉も無いほど反省しているのかは不明だが、今のこいつを目の前にして「自慢の倅だ」と言うとは。

もし冗談の積もりでそう言ったんだしたら、いつそ褒めてやっても良かったのに、

「勿論だとも」

なのにこいつは、

「定章は半人前の未熟者だが、夷狄の血だけは交じっていないのでな」

本気でそんな事を。

「訂正は効かないわよっ!？」

パンツという音。周囲の取巻きが色めき立つのが分かる。

「……構うな」

にも拘らず打たれて傾いだ顔を戻した宣章はその事に一言も触れず、それどころか打たれた事を気にかける価値も無い瑣事と切り捨てるかのように瞑目して、

「私も訂正に応じる意思は無い」

ただそれだけの言葉を口にした。

「……」

もう自分が怒っているのか笑っているのかも判らない。

……いや。

それどころかわたしの心がこの身体に残っているのかさえ判別がつかない。

これまで対決を先延ばしにしてきた仇敵。桐生宣章は実の兄と、その妻を追放してこの家を私物化した桐生マナカの敵だった筈だ。

「……そう。どうあっても自分の間違いを認めないってわけ？」

「私がか間違った事をした記憶はないが」

「母さんが父さんの娘を……わたしを身籠ったって理由でこの家から追い出したことも、あなたの中では正しい事にカテゴライズされるわけっ！？」

「無論」

なのに、どうしてわたしは　こんなにも惨めに叫んで震えているんだろう。

「どいつもこいつも最低よ！　わたしが生まれる前に鞍形山の封印を破った《瘡神》を討伐する為に《連盟》の手を借りておいて、あなたは義務を果したら帰るがいつって追い出したんでしょ！？　それで《連盟》の人たちが怒って桐生家の除名を検討しているって言うから父さんが渡英して、母さんと出会って……二人とも本当に苦労して……ようやく《連盟》との関係を修復して、母さんと一緒に帰国しようとしたら帰ってこなくていいとか言っでさ……」

後は言葉にならない。

「マナカ……」

重苦しい沈黙の中、嗚咽を堪えるのに精一杯の体を寄り添う従僕に預けて面を上げる。

「お前はマレビトの始祖である《神人》の血が混ざる事の恐ろしさを知らんからそんな事が言えるのだ」

重苦しい沈黙は、それを生み出したものによって打ち破られた。

「マレビトの禁を犯した出雲は滅びた。邪馬も滅びた。大和も滅びた。藤原も平も源も北条も足利も悉くマレビトの血を交ぜる事によって滅びたのだ」

重苦しい沈黙を上回る重苦しい言葉によって。

「世界法則の化身である《神人》もすべての世界法則を操れるわけではない。《神人》の操れる世界法則はそれぞれの《神人》によって違う。それは矮小な人の器に魂を宿した神の限界であろうが、始祖の異なるマレビト同士の婚姻はその限界を取り払ってしまう」

白でもない、黒でもない、灰色の男。

「簡単な話だ。始祖の力を受け継いだマレビトが十の法則を操れるとする。十の法則。それは人の身に過ぎないマレビトが操れる限界であると同時に人の姿を借りた始祖の限界」

日本古来のマレビトの伝統と風習を受け継ぐ桐生宣章は、しゃべる彫像よろしく何の感情も籠めず。

「マレビト同士の婚姻が同族間で行われるのなら問題ない。十の法則を操れる人の身に宿るのは十の法則を操る力。だが、そうでない場合。始祖の異なるマレビトの血が交わる時、十の法則しか操れない人の身に十より多くの法則を操る力が宿ってしまうのだ」

ぼそぼそと口を動かす事で重苦しい沈黙を作り出す。

「力は強まるう。だが扱いきれぬ力に意味はない。末那伽、お前は自信を持って断言できるか？ その身に宿した過分な力を扱いきれると断言できるか？」

「……」

その沈黙を打ち破れるモノは無い。

桐生家の長老である宣章より年若い一族や、外様に過ぎない妖怪たちに、この国の裏側における歴史そのものと言える言葉に異を唱える根拠は無い。

「もうおやめ宣章。末那伽ちゃんもやめておくれ」

いや、一人いた。

「真理得か？」

人間らしい表情を一度も浮かべなかったこの男が、初めて動揺らしき感情を露わにした。

「いつ戻った」

「亜米利加の支部で御前会議の事を聞いてとんぼ返りさ。人が悪い

ねえ、真偽迦の力が異国に及ばない事ぐらい承知しているだろうに
使いも遣さないんだからさ」

「しゃらん、と紙以外の材料で出来た扇子を広げて口元を隠し、く
つくつと可笑しそうな笑い声を漏らす妙齡の美女。

「使いを派遣するのは召集をかけた者の責任だ。悪いが私は呼ばれ
たほうだ。呼び出したほうではない」

「ふうん？ ま、あんたがそう言うならそういう事にしておいてや
るさ。まったくあんたときたら、何をすることも尤もらしい理由を用
意出来るからね」

「……」

「まあそれはさておき、だ。兄貴の娘をいじめるのもいい加減にし
な宣章。末那伽ちゃんに英国の《神人》アルトリウスの血が混じっ
ているなんてこの子の責任じゃないだろ」

わたしに似た黒く脈打つ髪を後頭部で纏め、一見ただけで高価
と判る白い和服で痩せぎすな肢体を包んだ桐生マリエ わたしの
叔母は、桐生家初代俱利伽羅に連なるマレビトの証である『朱い瞳』
を愉快そうに細めてそう言った。

「何の為の当代補佐だい。まあこの子は足りないところが多いけど
さ、そういうところを補ってやるのがあたしらの仕事だろうに」

流石の傑物も自分の弱点を知り尽くした実の姉には勝てない。逆
らえばいつ何時までおねしょをしていたとか、あんたが漏らしたう
んこを誰が片したと思ってるんだいと言われるとあつては尚更だ。

「……確かに少し言葉が過ぎたようだ、謝罪しよう」

「謝罪なら末那伽ちゃん……じゃなかった、ご当主殿におし。あた
しに謝ってもらっても仕方ないよ」

「そうだな。言葉が過ぎた。済まなかったな、末那伽」

「……」

ふう、と静かに吐息を漏らして頭を垂れた叔父と向き合う。

「……わたしも」

助け舟を出してくれた叔母の好意に甘えてはいけない。

「今の話は会議の前に持ち出す話じゃなかった。その事は謝る」

これはわたしが始めた戦いだ。

「そして、今日の会議はわたしが《王》^{アカシヤ}と接続して行う大事な儀式協力してもらえる？」

「協力しよう。《場》^{さいたん}の調整は終わっているな？」

「ええ、マギカと二人で最高の《場》を作った」

「ならば先んじて陣を組もう」

そう言つてマリエとサダミツを除いた一族の者を従えて、桐生宣章は左右の妖怪たちに一瞥もくれず桐生邸奥の霊地へと向かった。

……あれがわたしの敵。

強く、主義を異にする存在としてわたしの前に立ちはだかる不倶戴天の敵。

「はー、息が詰まった。ホント嫌な男。そう言えば口の巧い男は詐欺師か色事師のどっちかだつて婆つちやが言つてよね氷雨」

「あれは絶対詐欺師だよ氷柱。だつて女にもてなそうな顔だもん」

「そんなに責めないでやつておくれよ。あの男も中々どうして情に厚いんだよ」

「初耳ですマリエ」

「おや真偽迦は知らなかったのかい？ あいつは自分の食い扶持を減らして……と、こいつは口外しちゃいけないね」

「そういう風に途中でやめられると気になつて仕方ないのですが」

「まあいいじゃんか。それよりあの園児たちはなんだい？ まさか

玄爺と河童たちだつて言つたら、悪いけど笑つちまうよあたしは」

「いやいやいや。真理得嬢もお久しぶりで」

「おやおや本当に玄爺かい？ 相変わらず五十過ぎの婆にお嬢さんとは嬉しい事を言ってくれるねえ」

「ふん。露骨なご機嫌取りを真に受けるとはな」

「なんだい、あんたもいたのか豹部」

「いたら何だ？」

「まったく、真偽迦もこんな奴を呼ぶ事ないのに………とこころで

坊やは何で蹲ってるんだい？」

「っ……坊やはやめてくれよ」

「……なんだから。」

笑わせないでよ、もう。

「何にやにやしてんだよ？」

「別に」

ようやく立ち上がったサダミツを視界の端に収めて続ける。

「それよりあんた。さっき事のは貸しにしといてあげるから、いつか利子をつけて返しなさい」

「……お前のした事で相殺されないのかよ」

「知らない」

「知らないって何がだよ？」

「さあ？」

訝しげに首をひねるサダミツの背中を叩いて、当主であるわたしの指示を待つ一同に宣言する。

「ほら、いつまでも遊んでないで、常世の扉を開きに行くわよ！」

前途多難。問題は何一つとして解決していない。

それでも。

「了解しました。《瘧神》の誕生を防ぐ為に《王》の御前に馳せ参じましょう」

「うん、早く行こうよ末那伽あ」

「はー、ようやく元の大きさに戻れるのかあ」

「ん、随分当主らしくなったじゃないか末那伽ちゃんも」

「儂としては素直に喜べんがの」

「また豹部翁はそんな憎まれ口を」

「おい、行くのはいいいけど僕を置いてくなよ！　というかまだ歩けないんだから置いてかないでくれえー！！」

それでも未来の明るさを信じるわたしだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1252f/>

とある世界の裏側の伝奇活劇

2010年10月10日14時00分発行